

国語

(一般選考)

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

テンポのよいやりとりに役立つ言葉としては、^{※①}仲間内の符丁として働く言葉以外にも、一般に通じる常套句^{じょうとうく}、決まり文句、紋切り型の言葉と言われるものを挙げることができる。

たとえばテレビの街頭インタビューで、選挙に行かない理由をタズねられた人がよく、「誰がなつても変わらない」という類いのことを言うが、これは、候補者間に存在する重要な違いを見ずに即答できる便利な常套句だ。また、「これだからゆとり(世代)は……」とか、「団塊の世代が駄目にした」といった常套句も、実際には多様で複雑な物事を十把一絡げにして語れる便利な言葉だ。そして、この種の言葉を発しておけば、その後は、いわゆる「ゆとり世代」や「団塊の世代」に対する種々のステレオタイプに基づいて、あらかじめストックされている悪口を次々に言い合うことができる。

この最後の点に関して私にとって忘れがたいのは、大学の授業の後にある先生を囲んで皆で飲みに行つたときの出来事だ。そのときは、それぞれの出身県やら出身校やらをめぐって話に花が咲き、「○○県の人ってほんとそういうところあるよね」とか、「へー、○○高校を出たんだ。あそここのやつってさ……」等々とお互いに盛り上がった。そんな中で先生がふと、「ステレオタイプで話すというのは、何でこんなに楽しいんだろう」とつぶやかれた。それは咎めるようなトーンではなく、実際、その後も県民性などをめぐる会話は続いたのだが、確かに何でこんなに盛り上がるのだろうと我に返って、不思議なような、恐ろしいような気分になったことを、いまでもよく思い出す。

人はステレオタイプから完全に離れて語ることはできないし、そのことをキュウダンするつもりもない。しかし、そうした語りが無害ではないことは銘記しておきたい。「○○県民は……」とか「○○校出身者は……」という風に県民性などについて語ることは、「日本人は……」とか「アメリカ人は……」という風に国民性について語ることに、さらには、「ユダヤ人は……」とか「黒人は……」という風に民族や

人種の特性について語ることと地続きだ。そして、そのように十把一絡げに特定の集団の特性について語ることは、特定の集団を差別し傷つけることにすぐ結びつくか、すでにそうした行為を含んでいる。

滑らかに進行する言葉のやりとりは、あたかも定石に沿って囲碁を打つように、すでに繰り返し踏み均された会話の道筋を辿っている場合が多い。そして、その整備された道筋は、長く蓄積されたステレオタイプの温床でもある。また、たとえば政治家の討論会において当意即妙に思える受け答えがなされているように見えても、それは往々にして、シチュエトウに準備された想定問答や、古来錬成されてきたレトリックや雄弁術の賜物にほかならない。

A、「当意即妙さ」や「流暢さ」というものを、言語実践における美德としてどこまで賞賛すべきなのか、私たちは一度問い直す必要があるだろう。昨今はテレビなどのマスメディアだけではなく、たとえばSNS上で展開される論争でも、次のような光景がよく見られる。すなわち、相手の主張や批判に対して瞬時に切り返す言葉が「論破」としてもはやされ、相手がそれに対して間髪容れずに反論しなければ「論破された」と判定される、という光景だ。しかし、後でそのやりとりをゆっくり辿ってみると、「論破した側」はたんに論点をずらして攻撃していただけであり、とても「論争」の名に値するものになっただけであった、ということも少なくない。そこでは、当意即妙の切り返しが示唆するところの(実情はどうであれ)頭の回転の速さや「地頭」なるものの良さが賞賛の対象となり、議論の内容という肝心のものが置き去りにされている。

また、これはテレビなどでお笑い芸人が見せる突っ込みに影響されているのだろうが、日常の会話やプレゼン、スピーチといった場で、誰かが言葉を噛んだり言葉に詰まったりすると、「いま噛んだよね!」などとシテキされ、笑いが起こるということが、いつの頃からかよく見られるようになった。噛んで何が悪いのだろうと思うのだが、これもまたひとつの「お約束」となってしまうようである。

べらべらしゃべれることや、間髪容れずに話を切り返せることは、必ずしも美德ではない。むしろ私たちは、秒単位のタイムスタンプが押された言葉がネット上を無数に流れ続けるこの時代だからこそ、言い淀む時間こそを大切にし、言葉をゆっくりと選び取りながら語る実践に意識的に向かうべきではないだろうか。ステレオタイプな言説によつて多様な現実をばつと一括りにして済ませたり、当意即妙な受け答えをすることそれ自体を目的とする実践よりも、現実の難しさや複雑さを受けとめた言葉を慎重に紡ぐうとする実践の方を尊重すべきではないだろうか。

ただ、そうした実践には、どうしても時間と労力がかかるという特徴がある。ステレオタイプな言説に頼らずに別の言葉を探すのは、なかなか骨の折れる作業だ。現実をよく見ながら、この言葉ではまだしつくりこない、(この言葉では……過ぎる)と迷いつつ、しつくりくる言葉が訪れるのを待たなければならぬ。お約束通りでない生きた言葉が探され、交わされるには、話し手と聞き手双方の待つ努力が欠かせないのだ。

特に二〇〇〇年代以降にこの国の各所で行われるようになった「哲学対話」や「哲学カフェ」といった活動は、以上のような「時間と労力のかかる実践」の場として捉えることもできるだろう。哲学対話や哲学カフェには、その具体的なやり方に関しては個々にさまざまな違いはあるが、おおよそ次のような点は共通している。

- ・ 比較的少数数の人同士が、「真面目」とは何か」とか「子どもと大人の境目は？」等々の個別のテーマについて、対等な立場で話し合う。
- ・ 人を攻撃したり傷つけたりする言葉でなければ、何を言ってもよい。
- ・ 発言せずに聞いているだけでもよい。
- ・ 他人や本などから得た知識ではなく、自分自身の経験に即して話す。
- ・ 人の発言を遮らず、最後まで聞く。
- ・ 人の発言の内容を評価したり、強く否定するような態度をとったりしない。

私自身、新潟大学の教員時代に一度、哲学対話に参加したことがある。そのときの正直な印象は「物足りない」だった。普段の演習や研究会などの場であれば、もっと長い時間をかけて、もっと問題について突き詰めて話し合い、一定の結論が見えてくることもあるのに、哲学対話の場は、これから議論が

煮詰まるというところで終わってしまったと感じ、消化不良を覚えたのだ。

しかし、対話を終えたほかの参加者の方々の顔は皆、意外なほど晴れ晴れとしていて、楽しそうだった。たくさんの刺激を受け、自分のものの見方が変わったという感想を述べる方もいた。その様子に触れることで私は、自分がある点でとても恵まれていることに気づいた。つまり、自分は大学の教員という職についてるので、普段から、自分の話を——講義の場合は九〇分以上も——人に最後まで聞いてもらえるのだ。たとえば授業中に難しい話題に入り込んだり、話の途中で疑問が生じたりして、言い淀んだり黙り込んでしまったりすることもある。そのようなとき、私は必死で言葉を探して絞り出そうとするのだが、その間も、学生たちはじっと待っていてくれる。大学以外の場も同様だ。メディアの取材などでも、自分が言葉を選び取るうと四苦八苦している間、記者の方は我慢して待っていてくれる。そのような恵まれた状況に、私はすっかり慣れてしまっていた。(そして、学校の教員は多かれ少なかれ同様の傾向があるのではないだろうか。だから、世の「先生」は披露宴などでのスピーチが長くなりやすく、響を買いやすい。)

遠慮をしたり、知ったかぶりをせずともよいこと。素朴に思われそうなことでも否定される恐れもたずに、自分の経験に即して自由に語れること。話している途中で詰まっても、相手が次の言葉を待ってくれること。話を途中で遮られないこと。——こうした機会は、多くの人にとって必要なものであるにもかかわらず、貴重なものになっている。だからこそ哲学対話や哲学カフェは、哲学する場である以前に、安堵と解放と承認の場ともなるのだろう。

したがって、私たちがいま行うべきなのは、そのような場の形成をもっと許容し、促すことだ。お互いが相手を急かさずに、言葉が紡がれるのを忍耐強く待つ実践、そして、相手とともに物事をよく見て、よく考え、しつくりくる表現をもっと見つけ出そうとする実践は、哲学対話や哲学カフェ以外にも、本来そこかしこにあつてよいはずである。

(古田徹也『いつもの言葉を哲学にする』による)

※①仲間内言葉以外にも……筆者はこの前の部分で、業界用語などについて説明している。

問一 ― 線部 aゝ j のカタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分は読みをひらがなで書きなさい。

問二 A と B に入る接続詞として適切なものを、次のアゝエの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア ちなみに イ ましてや ウ そもそも エ それゆえ オ なぜなら

問三 ― 線部①「ステレオタイプ」に当てはまる事例の説明として正しいものには「○」を、正しくないものには「×」を、次のアゝウのそれぞれについて書きなさい。

ア 街頭インタビューで選挙について聞かれ、「誰がなっても変わらない」と答えること。
イ 懇親会の場を盛り上げるために、参加者の興味をひく未知の話題を取り上げること。
ウ 相手の主張や批判に対し、「論破」するような姿勢を取ることなく議論を行うこと。

問四 ― 線部②「ステレオタイプで話すというのは、何でこんなに楽しいんだろう」とあるが、その楽しさが生まれる理由を筆者はどのように捉えていますか。筆者の考えについての説明として最も適切なものを、次のアゝエの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 話題に取り上げられた集団に対しての悪意を完全に排除したものであるから。
イ あらかじめストックしている言葉を使うだけで共感し合えるものであるから。
ウ 互いに対話を重ねることで未知の状況に対する理解が深まるものであるから。
エ 特定の集団への差別や偏見にはつながらない客観性を備えたものであるから。

問五 ―線部③「滑らかに進行する言葉のやりとり」についての筆者はどのように考えていますか。筆者の考えについての説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア マスメディアやSNS上で展開される論争の場面で見られるように、相手の主張などに瞬時に切り返す反応の速さだけに関心が向きがちになり、肝心の議論の内容が軽視されることが危惧される。
- イ 私たちが日常の言語実践において他者とのコミュニケーションを適切に行っていくためには、対話の「当意即妙さ」や「流暢さ」といったことが必要なのであり、美德として評価されるべきである。
- ウ 秒単位のタイムスタンプが押されて言葉がネット上を無数に流れ続けている現代社会にあつては、多様な現実を一括りにして捉えてその理解を共有することは、時間と労力の効果的な節約になる。
- エ 事前に用意された想定問答集や、繰り返し実践的な場をくぐり抜けて整備されたレトリックや雄弁術などが、多様な対話の道筋を明確にし相互理解を深化させる上での不可欠の財産となっている。

問六 ―線部④「そのときの正直な印象は「物足りない」だった」とあるが、筆者が「物足りない」と感じたのはどうしてですか。筆者が「物足りない」と感じた理由を二つ書きなさい。

問七 ―線部「哲学対話」や「哲学カフェ」といった活動」を筆者はどのように評価していますか。「哲学対話」「哲学カフェ」に対する筆者の評価について、簡潔に説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「面白いよ」

わたしたちは高校のクラスメイトだった。課外授業か何かで遠出した帰りの電車のなかでひとりだけ本を読んでいる雨宮くんが気になって、何を読んでいるの、それ面白いの、と聞いたら、目を少しだけあげて、あんまり面白くもなさそうな顔で、そう言った。

それがきっかけで、名前だけは知っていたけれど読んだことのなかったその小説家の本をカ^aしてもらうようになって、わたしはすぐに夢中になり、それから雨宮くんとわたしは彼の小説やそのほかの小説や、それぞれが好きな音楽について色々な話をするようになった。わたしも雨宮くんも小説を読むのが子どものころから好きだった。けれどこれまでそれについて誰かとゆっくりと時間をかけて話をするというような経験がなかったし、そういうことを学校の誰かと話すなんてことは考えてもいなかった。

毎日会っているのに学校で話をするだけでは足りなくなり、電話をかけ、手紙を書いた。お互いがお互いにとってとくべつな存在になるにはそんなに時間はかからなかった。わたしたちは高校三年の終わりにから付きあいはじめて、そして二十一歳の夏に別れてしまった。

いつだったか、雨宮くんと植物園を歩いていたときに（わたしたちはよく植物園を散歩した）、もしわたしたちがこのさきに別れるようなことがあっても、その小説家が死んだら必ず会うことにしようという約束をした。どこにいても？ そう。誰かほかにつきあっている人がいても？ そうだよ。じゃあ結婚していてもだね。そうだよ。いいよ、わかった。ねえ、おじいちゃんとかおばあちゃんとかになって死にかけていても？ そうだよ。場所は、いつもの植物園の入り口にした。有名な植物があるわけでも^①気の利いた^②つくりをしているわけでもなく——それどころか手入れが行き届いているなんて^bジョウダンでも言えない、いつ取り壊されても不思議じゃないほどにさびれた、それはそんな植物園だった。ただ山間の田舎町にあったせいかな広さだけはじゅうぶんにあって、わたしたちはふたりでいること、そしてふたりで、ふたりにしかわからない話をすることに夢中だったから、何時間でも——本当に何時間だって、歩きつづけることができた。広大な敷地内にはちよつとした草原や小さな山もあり、そのささやかな頂

上に登ってなだらかなふもとを見おろすと、深緑色の葉に覆^cわれた蓮池^{はすいけ}がどくどくと広がっていた。いつ行ってもほとんど人はおらず、誰かとすれ違うことなんてめつたになかった。名前を知らない木や、枯れかけた草だけの巨大な鉢植えなんかがごろりとならび、ときどきは色鮮やかな花びらにふれ、そしてひび割れたり茶色に曇^dったりしている温室のガラスを見つめっていると、わたしたちは誰もいなくなった世界に取り残された最後のふたりにでもなったような、そんなあまい気持ちになることもあった。植物のことなんて何もひとつも知らなかったけれど、まるでふたりのためだけに存在しているようなその植物園を、わたしたちはとても気に入っていたのだ。

今日は火曜日だった。今から十四年もまえに一度交わしたきりの^①そんな約束を雨宮くんは覚えているはずないと思っただけれど、でも雨宮くんがどこかで元気でいるなら今朝、彼が亡くなったことは必ず知っているはずだった。そしてもしその約束を思い出すことがあったなら、そうすれば——雨宮くんは、来ると思った。

ぬるくなった紅茶をひとくち含んで、それをゆっくり飲みくだして壁にかかったカレンダーを見た。あと四日。わたしは日曜日までの朝から夜を、これまで味わったことのないような気持ちで過ごすことになった。あいかわらず不安ではあるけれど、どこかなつかしくて明るい光が遠くのほうからすつと伸びてくるような。それと同時に、底のほうで何か暗い音が響いているのが聴こえるような。

そして日曜日^②の朝、そういう自分に少し呆れる^{あき}気持ちと恥ずかしい気持ちがないでもなかったけれど、それでもいつもより念入りに化粧水をたたき、いつもより時間をかけて丁寧に眉を描き、それからめつたにはかないけれどすごく気に入っているかたちのスカートを選び、電車に乗った。わたしは一度目の結婚で四国へ移り住み、五年前に離婚してからは京都の大学の事務職を見つけ（けつきよくそこも長くはつづかなかつた）、すぐそこに山がセマ^eる町に住んでいた。雨宮くんはまだあの町に住んでいるのだろうか。あのころ、京都にある大学へ通っていたから、もしかしたら。

目的の駅で降りたのはわたしひとりだけで（そも

そも電車にもほとんど人はいなかった)、呼び出しボタンを押して呼ばばあるいはどこからやってくるのかもしれないけれど、カイツには駅員さえいなかった。ひとけのないその静かで小さな駅を出て、わたしは植物園までの道を歩いた。

目に入ってくるもの、匂いとなってやってくるもの何かもが、たまらなかった。今の自分がいつを生きている自分なのか、足を一歩ふみだすたびに、ほどけてゆくのが見えるようだった。着ていたワンピースの模様。ハいていた靴の硬さ。わざと機嫌を悪くして雨宮くんを困らせた理由。夏の熱さに乾いた土のうえに大きな木の葉がつくる、ひんやりした青い影。喉のかわき。歩きながら、色んなことを忘れたくないとつよく思ったときのこと。わたしは何もかも思い出すことができた。最後にこの道を歩いたあの日から、今のこのときまでのけつして短くはない時間なんてまるでどこにもなかったかのように、わたしはいつものように、植物園までの道を歩いているのだった。雨宮くんが待っているあの植物園まで。雨宮くんは今日、もうこの道を歩いたのだろうか。それとも、これから歩くのだろうか。

別れた原因は、雨宮くんにべつに好きな女の人が出来たからだ。出会ってしまったんだと、雨宮くんは申し訳ないと頭をさげてわたしに謝った。どうしようもないと何度も謝った。わたしは世界中に無数にいる恋人たちのなかでも、もしかしたら最後まで一緒にいることができるふたりじゃないかなんだろうかけれど、それでもわたしは本当にそう思っていたので、雨宮くんが誰かべつの人のことを好きになるなんて想像もしていなかったし、それをほかの誰でもない雨宮くんの口から聞いてもお、信じる事ができなかった。出会ってしまったって、どうということ。あなたはわたしに出会ったんじゃないのか。雨宮くんは答えることができなかった。黙っている雨宮くんを見つめると、なんだか自分が誰かのよくある別れ話の中にもいるような感覚がはじめて、そこから何も話せなくなった。でもそれはぜんぶ現実起こった本当のことで、雨宮くんがどうしようもないと言ったように、わたしもわたし自身をどうすることもできなかった。そのあと何年も、本当に何年もつらい思いを引きずった。

そんなことがあったのに——そんなことがあった

けど、と思うべきなのかな、今日、雨宮くんと会って、それで？ もちろん、わたしはもう雨宮くんにとくべつな感情をもつてはいないはずだった。ぜんぶ昔のことなのだから。ただ、思いだせば少しだけ胸が痛いような気がするけれど、それは人生のある時期の色あいを思い起こせば必ずやってくる痛みでもあるはずだから、それはもう雨宮くんにはきつと関係のないことなのだ。わたしは深呼吸し、こう思った。何年も時間がたって、色々なことがあって、こんなふうに見えるのは、なんというか、うれいことなのじゃないのか。お互いが元気で、お茶をして、笑って他愛のない話ができれば、それはとてもいいことなのじゃないか。わたしは大きな息をひとつ吐いた。

二時を十分過ぎても、二十五分過ぎても、何も起こらなかった。わたしは錆びた門の前に立って、自分が誰にも見つけてもらえない人間であることを、わたしに会いたいと思う人間なんてひとりもないのだということを打ち消すように、 아이폰をさわってどうでもいいような記事を読みつづけた。リンクからリンクへ飛び、そこに映されるどうでもいい文章をただ目に入れてスクロールしつづけた。そしてだんだん何をしているのかわからなくなった。顔をあげると、放置されて傷んだ自転車のわきを、猫がゆっくりと横切つてゆくのが見えた。ふいにどうしようもない淋しさがこみあげてきた。それはこれまで感じたことのある淋しさのいろんな部分が都合よく混ぜあわさった淋しきで、何がそんなに淋しいのか、自分でもよくわからなかった。わたしは何歳になっても、わからないことばかりだ。それで、わからないことに安心しているのだ。そして、わからないと言いがら、ただこんなふう淋しくなることだけがいつまでもできて、こんなことをただくりかえして、それで年をとっていつまでもこんなふうひとりきりでおんなじ場所に立ち尽くしたまま、そうやって、わたしはいつまでだって、そうやってゆくのだ。うつむいて、自分のつまさきを見た。足を動かすと、ヒールの塗りがはげているのが見えた。はつきりとわかるはげかただった。家をでたときはちゃんとしていたのに。気がつけばわたしはそこに二時間も立っていた。あと五分したら、帰ろうと思った。

(川上未映子「日曜日はどこへ」による)

問五 — 線部② 「日曜日の朝」の「わたし」はどのような状態だったと考えられますか。「わたし」の心情についての説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 火曜日からの四日間を明るい光が伸びてくるような期待感の中で過ごしてきた。ついに日曜日の朝になって、薄々感じていた暗い不安に一気に取り囲まれ、押しつぶされそうになっている。
- イ 火曜日に連絡を取ることができて日曜日に雨宮さんと会う約束をした。別れてから五年の月日が経ったことに気づき、楽しかった昔の日々に戻ることができるという幸福感に包まれている。
- ウ 火曜日からの四日間はこれまで味わったことのない高揚感に包まれて過ごしてきた。待ちに待った日曜日になり、これから訪れるであろう未来の確かな明るさに心を奪われてしまっている。
- エ 火曜日からの四日間を、心のどこかに不安を感じつつも明るい光が伸びてくるような期待をもって過ごした。再会できるかどうかは分からないものの、大きな期待感の中に身を置いている。

問六 — 線部③ 「何もかもが、たまらなかった」のはどうしてですか。その理由についての説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 目に見えるものや匂いとして感じられるものが、雨宮くんとの日々を思い出させるものだったから。
- イ 目に入るものもそこにただよう匂いも、これまでのけっして短くはない時間につながっていたから。
- ウ 自分の五感に訴えてくるもののどれもが、「生きている」という感覚を失わせるものであったから。
- エ 自分が見ているものや感じている匂いが、ここに来てしまったという後悔の念を呼び起こしたから。

問七 — 線部④ 「あと五分したら、帰ろうと思った」という一文には、「わたし」のどのような心情が表れていますか。この時の「わたし」の心情について簡潔に説明しなさい。

【三】 次の①～⑤までの空欄に、——線部の言葉がカッコの中の意味になるよう、漢字一字を入れて慣用的な表現を完成しなさい。

- ① 犯人たちは、口（ ）を合わせてしらを切った。〔打ち合わせておいて話が合うようにすること〕
- ② 感（ ）まって涙を流した。〔この上もなく感動すること〕
- ③ 彼はいつか必ず頭（ ）をあらわすはずだ。〔多くの中から一歩リードすること〕
- ④ 彼の発言が混乱に（ ）車をかけた。〔物事の進み具合をいつそう進めること〕
- ⑤ ここは彼にげたを（ ）けるべきだ。〔相手に処置を任せること〕

【四】 次の①～⑤のことわざの意味として適切なものを、後のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 覆水盆に返らず
- ② 水は方円の器にしたがう
- ③ 二兎を追う者は一兎をも得ず
- ④ 青菜に塩
- ⑤ 藪やぶをつついて蛇を出す

ア 元気があった人が元気がなくなって、しゅんとしてしまうこと。
イ 人は環境や友人によって、良くも悪くもなるということ。
ウ 同時に二つのことをしようとしても、どちらもうまくいかないこと。
エ 似ている者や気の合う者は、自然と集まり仲間を作るということ。
オ 一度したことは、もはや取り返しがつかないということ。
カ 余計なことや不必要なことをして、悪い結果を招くこと。

【五】 次の①～⑤までの空欄に、カッコの中の意味になるよう、漢字を一字ずつ入れて四字熟語を完成しなさい。

- ① 離合（ ）（ ）〔離れ離れになったり、集まって再会したりすること。〕
- ② 竜（ ）蛇（ ）〔初めは勢いがよいが、終わりの方になると振るわなくなること。〕
- ③ 和（ ）洋（ ）〔日本人がもつ精神と西洋伝来の学問の才能をあわせもつこと。〕
- ④ 温（ ）（ ）新〔昔のことを学んで、そこから新しい考えを見つけること。〕
- ⑤ 万物（ ）（ ）〔すべての物が絶えず移り変わっていくということ。〕

受験 番号
氏 名

一

問七	問六		問四	問二	問一			
	○	○		A	f	a		
				B			ね	
		g			b			
						問三	ア	h
		イ	ごう					
					ウ	らず		
						j	e	

※

二

問七	問五	問四	問二	問一				
			①	f	a			
			問六		②		して	
						g	b	
						問三	いて	
						①	h	c
					②	われた		
					i	d		
					③	ったり		
					んだ	e		

※

三

①	
②	
③	
④	
⑤	

※

四

①	
②	
③	
④	
⑤	

※

五

①	
②	
③	
④	
⑤	

※

解答例

受験 番号	
氏名	

--

一		問二	問四	問六	問七
問一	a	A	イ	○	(例) 「哲学対話」のように自分の意見を否定される恐れをたず、相手が自分の次の言葉を待ってくれるような機会は、多くの人にとって必要なものである。
f	ウ	問五	ア	○	
尋	さっこん	B			(例) 大学の教員であるため、話を最後まで聞いてもらうことに慣れていいたから。
ね	g	エ			
b	指摘	問三			
糾弾	h	ア			
c	つむごう	○			
めいき	i	イ			
d	さなきらざ	×			
じようせき	j	ウ			
e	就	×			
周到	いて				

--

二		問一	問二	問四	問五	問七
問一	a	f	①	(例) 二人が別れたとしても、ある小説家が死んだら植物園で会おうという約束。	エ	(例) 雨宮くんが来てくれることを信じて二時間も待っていて、おそらく雨宮くんは来ないと分かっているが、もしかしたらというかな望みをもっている。
貸	改札	ウ	②		問六	
して	g	履	イ	ア		
b	冗談	いて	問三			
c	h	きげん	①			
おおわれた	ウ	i	②			
d	エ	いたんだ	③			
くもったり	イ	j				
e	つこう	迫				
る						

--

三
① 裏
② 極
③ 角
④ 拍
⑤ 預

--

四
① オ
② イ
③ ウ
④ ア
⑤ カ

--

五
① 集
散
② 頭
尾
③ 魂
才
④ 故
知
⑤ 流
転

--